

印度の古話

幸田露伴

青空文庫

いづれの邦くににも古むかし話ばなしといふものありて、なかなか近こき頃ころの小説家などの作り設くとも及びがたきおもしろみあるものなり。されど小国民を読むほどの少年諸子には、桃太郎さるかに猿かつせん蟹か合あ戦せんの類たぐいも珍めづらしからざるべく、また『韓非子かんびし』『莊子そうじ』などに出いでたるも珍めづらしからざるべければ、日本支那のは姑しばく措ちきて印い度の古こ話を蒐あつめ綴つづり、前さきに宝くらの蔵くらと名なづけて学ま齡れい館くわんの需もとめに応おじ出版しゅつぱんせしめしに、おもひのほか面白おもしろしとて少年諸子の、なほその他ほかにも話ありや、あらば聞かせよといひ越たまし玉たまふもあるまま、今また一条の物語りをここに載すべし。印度は諸子が父上母上の頃には天竺てんじくと呼びたる最いと早はやくより開け進みし国にて、今こんにち日にちよりし

て評するも世界の文明の母ともいふべきところなれば、従つて趣^お味^{もむき}ある古話にも富みたり、御望みならむには随分諸子のために珍奇なる話を取り出して^{いだ}一年や二年の間はこの紙上に掲げん。さてこの号には、利^{りた}、阿利^{ありた}兄弟の譚^{はなし}を載すべし。

むかしむかし、一人の長^{ひひとり ちようじや}者ありて二人の子を有^もてり。兄を利^{おとと}といひ弟を阿利^{つねづね}といひしが、長老は常々二人に對^{むか}ひて、高きものは墮^おち、常なきものは尽き、生あれば死あり、会へるものは離^されるることあらむと諭^{さと}しける。されど一家は常に富み榮えて別に忌^{いま}はしきことにも遇^あはず、世を楽しく過^あごし行きけるに、長老が諭^おしのあたるべき時は来りて、老^{おい}の身に病を得しより長者は

枕まくらつひにあがらず、いよいよ生命いのち終るべく定まりたり。時に長者
 は二人の子を枕辺べに招きて、死するも生くるも天命なれば汝等そちたち
 みだりに歎くべからず、ただ我終焉いまわに臨みて汝等に言ひ置くこと
 あれば能く心こゝろに留めて忘るるなかれ、我が亡なき後のちは汝等二人決し
 て分れをることをすべからず、譬たとへば一ひとすじ条の糸にては象を係つなぐ
 こと難けれど多くの糸を集めて繩なわとなさば大象をも係ぐを得べき
 がごとく、兄弟力を併あわせて家を保たんには家も無事長久なるべ
 れど汝等互ひに私慾を図りて分れ分れとなりなば、一条の糸の弱
 きがごとくなりて家も衰へ亡ぶべし、この我が訓おしえを能く記よえて決
 して背そむくことなかれと苦ねんごろに誠いましめ諭して現世このよを逝さりければ、兄
 弟共に父の遺訓したがに随したがひて互ひに助けあひつつ安楽に日を消くしけり。

さるほどに弟も生長して年頃となりしかば、縁ありしを幸として兄はそのため婦を迎へ遣りしに、この婦心狭くして良からぬものなりしゆゑ夫に對ひて、汝はあたかも奴隸のやうなり、金銀用度も皆兄まかせにて我が所有といふものもなく、唯衣ることと食ふこととに不足なさざるばかりなれば奴隸といふても宜かるべし、汝如何ほど働きたりとて唯この家を富ますのみにて汝の所有の殖ゆるにもあらねば、まことに以て樂み薄し、と賢顔に説きければ、弟はこれより分居の心を生じて、兄に財産を分ちくれむことを求めける。兄は、亡き父上の御遺言をも忘れて汝は分居せむとや、さても分別違ひのことを能くも汝はいひ得るよ、と度々弟を誠め諭して敢て弟のいふところを許さざりしが、弟の

堅く分居せんといひ張りて已やまぬに打負けて、遂つひに一切の財産しんだいを正ま半ふ分たつにし、その一方を弟に与へぬ。

弟夫婦は年とし少わかきまま無む益やくの奢おご侈りに財つを費いし、幾いく時ばくも経ぎざるに貧ひしくなりて、兄の許もとに合ごう力りよくを乞こひに來きければ、兄は是非なく錢十萬を与へけるに、それをも少しば時しに用つかひ尽してまた合力を乞こひに來りぬ。一人の弟のことなればと、苦くき顔かほもせで兄はいふまままた十萬を与へしに、またそれをさへ遣つかひ果して、例の通りろうに無む心しんに來ること前の如し。前後合せてかくの如ごときこと六ろく反へんに及およびけれど、その度ごとに十萬づつ与へて兄は惜おしともおもはざりしが、七反目にいたりてさすがに堪こたへきれずなり、父上の遺訓にも背そむきしのみか数しばしば次しばしば來りて財を乞ふ段、弟とはいへ奇怪なり、

貧しくなりて苦むも皆自らの心がらぞ、この度だけは十万錢を例のごとくに与ふべけれど以後は来るとも与ふまじきぞ、能く心して生活なりわいの道を治めよ、と苦ろねんごに説き示しければ、弟はこれを口くちおし惜く思ひてその後生活のちの道に心を用ひ、漸く富ようやを致いたしけるが、それに引替へ兄はまた数次弟しばしばに財を与へしより貧しくなりて自ら支ささへがたきに及び、かつて与へしこともあれば今は弟に少時しばしのところを助けてもらはむと、弟のところいたに到りて、我この頃は大きに財に乏しきゆゑ何卒なにとぞ合力してくれよといひけるに、弟は答へて、先に我が窮困おんみもとして汝が許わづかにいたり僅の合力を乞ひしとき汝は何といひ玉ひし、貧しくなりて苦むも皆みづからの心がらぞと情つれなく我を責め玉ひしにはあらずや、我今汝にその語ことばを返さん、

貧しくなりて苦むも皆みづからの心がらぞ、我は汝を助けがたし、
と恩を忘れて謝絶りける。

兄は弟のあさましき言葉に深き愁を起し、血統の兄弟にてすら
もかくまでに酷く情なければまして縁なき世の人をや、ああ厭は
しき世の中なりと、狭き心に思ひ定めて商買を廃め、僧と身
をなして、ひたすらに悪き世を善に導かんと修行に心を委ね、あ
る山深きところに到りて精勤苦行しゐたりけるが、年月経て一
旦富みし弟の阿利は、兄に對して薄情なりし報いのためによ
損毛のみ打つづきてまた貧者となり、薪を売りて辛くも活くる身
となりけり。時に兄の利は托鉢なして食を得んと城中に入り
しが、生憎布施するものもなかりければ空鉢をもて還らんと

しけるが、途みちにて弟あにに行遇ゆきあひたり。弟は兄あにを剃髮ていはつぜんえ染衣せんいの身みならむとは思おもひもかけず、兄は弟を薪まき売り人びとになりをらむとは思おもひもかけず、かつ諸もろとも共ともに窶やつれ齡とし老らいたればそれとも心こころづかざれど、弟の阿利あには尊うやまつげなる僧そうの饑うゑたる面おも色もちして空鉢くうはちを捧ささげ還かへる風ふう情ぜいを見るより、凶あやらず惻隱そくいんの善心ぜんしんを起おこし、往時むかし兄あにをば情つれなくせしことをも思おもひ浮うめて悔くいつつ、薪まきに代かへて僅ひえに得えし稗この麩こあるを与たまへんと僧そうを呼よび留とどめ、尊そん者じやよ、道みちのためためにせらるる尊うやまつき人ひとよ、幸さいひに我われが奉ほうつる麩食そしを納なめ玉たまはむや、と問とへば僧そうはふりかへりて、薪まきを売うる人ひとよ、世よの慾よくを捨すてし我われらなればその芳こころざし志しを受うくのみ、美味うまいと麩食そしとを撰えらばず、纔わずに身みをば支たふれば足たりといふにぞ、便すなわち稗この麩こを布施ふせしけるに、僧そうは稗この麩こを食くひ訖おわり

て去たりける。

その後阿利のちは薪を取らんと山に行きしが、道にて一匹の兎をうさぎ見ければ杖つえふり上げて丁ちようと撩うちしに、忽たちまち兎は死人と變じて阿利うなじの項うなじに搦なみ着きたり。これはと大きに驚き呆あきれて、推おし剥はがさんと力いを出せど少しも離ることなければ、人を頼たみて挽ひき却さらしめしも一向いさらだにその甲か斐いなし。是非よなく夜よに紛まれて我家わがやに歸かれば、こはまた不思議や、死人の両手は自然じ然じに解とけて体たいは地ちに墮おち、見る見る灼しやく々しやくたる光輝くわうきを発はして無垢むくの黄金像くわんごうざうとなりけり。阿利おのずは大きに驚きながらその像こうの頭べを截きり取りしに、頭あはまた新あらたに自然おのずと生あじ、また截あり取あればまた生あじぬ。手てを截あり去あれば手てまた生あじ、脚あしを截あり去あれば脚あしまた生あじ、金かねの頭あ金かねの手て金かねの脚あし家い充っぱ

満いとなりて、爛々らんらん燦々さんさん々々さんさんと輝きわたりければ、この事王の耳に入りしが、仔細しさいを問ひ玉ふに及びて、これ善行の報むくいなりと知れ、福人ふくじんなりとて売薪者たきぎうりを急に一聚落ひとむらの長おさに封ぜられしとぞ。眼前めのまえには利ありとも不善によりて保ちたる利は終ついに保ちがたく、眼前には福を獲ずとも善心によりて生ずる福は終に大きなるものなり。

むかしむかし棄老国と号よばれたる国ありて、其国そこに住めるものは、自己おのが父母ちちははの老い衰へて物の役にも立たずなれば、老人としよりは国の費えなりとて遠き山の奥野の末などに駆り棄すつるを恒例つねとし、また一国の常法おきてとなしめけるが、ここに一人の孝心深き大

臣ありけり。日頃やさしく父に事^{つか}へて孝養怠りなかりしが、月日の経^たつは是非なきことにてその父やうやく老いにければ、国法に順^{したが}はむには山にもせよ野にせよ里距^{はな}れたる地へ棄^{ところ}つべくなりぬ。されども元^{もと}来^{より}孝心深き大臣の、如何^{いか}で然^さる酷^{むご}きことをなし得べき。事露^{あら}はれて国法に背^{そむ}きたる罪を問はれなばそれまでなりと、深く地を掘りて密室をその中^{うち}に造り設け、表面^{うわべ}は那^{いざ}処^{ずく}へか棄てたるやうにもてなして父をば其^{そこ}室^{むろ}に忍ばせ置き、なほ孝養を尽しける。

時にたまたま天の神ありて突然^{にわか}に棄老の王宮に降^{くだ}り、国王ならびに諸臣^{むか}に對^{むか}ひて、手に持てる二^{ふた}の蛇^{つへび}を殿上に置き、見よ見よ汝^{なんじ}ら、汝らこの蛇のいづれか雄^おにしていづれか雌^めなるを別ち得るや、

別ち得ばよし、別ち得ずんば国王よく聞け、汝を亡ぼし、汝の国
 をも我が神力じんりきもて滅すべし、七日の間なぬかにこの棄老をば殄ほろぼすべ
 きぞ、と嚴然として誥つげければ、王は大きに驚おそき畏れ、群臣と共
 に頭こうべをあつめて答弁こたえをなさんと議はかれども、誰たれとて蛇の雌雄をば見
 定むべくもあらぬままただ当惑するばかりなり。国の大事ぞ、等な
おざり閑になせそ、もし何者にもあれ天神の難問を能よく解よき開き得ば
 厚く賞与をすべきなりと、一国内あまねに洽あまねく知らしめて答弁こたえを募るに
 応ずるものも更になし。彼の大臣は家に歸りて、もし我が父の知
 ることもやと例の密室に至りてこの由よしを述べけるに、そは難むつかし渋しぶ
 きことにあらず、軟やわらか栗こまかにして細こまかきものを蛇に近さづけてその躁さわぐ
 を雄と知り、静かなるを雌と知るべしと教へければ、大臣は急に

王宮に行きてこの旨をいひ出で、試しみるに果してその言の如く、雄雌紛るるかたもあらず。王は悦びて天神よろこに對むかひ、これは雌にしてこれは雄なりと答ふるにその答誤りなければ、天神はまた一大象を現あらわして、この象の重さ幾斤両ぞ、答へ得ずんば国くつがえを覆さんと難題いだを出しぬ。

王も諸臣も、如何いかにして秤はかり 皿ざらにも載せがたきこの大象の重さを知り得んと答へ迷まどひけるが、彼かの大臣はまた父に問ひ尋ぬるに、そは易やすきことなり、象をば船に打乗せて水の船を没かくすところに印しるしをつけ置き、さて象の代りに石を積みて先の印のところまで船の水に没るるを見計らひ、一々石の量目めかたを量り集めなば即すなわち象の斤両を得べしと教へられ、道もつとも理りなりと合点がてんしてこの智ちをもつて天

神に答へける。よしよし、さらばまた問はむ、一いっきく掬の水の大海
 より多きことあり、この理を知るや、と天神の例の如くに難問を
 下すに、例のごとく王らはまた答へを為なし得で困りけれど、彼大
 臣は例のごとく老父の教を得て、その語は極めて解きやすし、も
 し人ありて慈悲心をもて父ちちはないし母乃至世の病人などに水を施さば、
たとい仮令その量少くして僅に掌わずかのひらむすに掬びたるほどなりとも、その功德くどく広
 大無辺にして大海といへども比ぶるに足らじといひければ、この
 度は天神忽ち身を変じて、眉まゆうつくしく色あざやかに、玉とも花
 ともいふべきまで姣麗かおよき女と化けながら、世間に我ほど端うつくし厳き
 ものあるべきやと尋ねたり。

王らは例の如く答なかりしが大臣はまた父にききて、世間には

なほ端うつくし厳たえく妙なるものなきにあらず、道を守りて心を正し、
 父母つかに事へては孝に君に事へては忠に、他に對しては温和にして、
 心おおいに大なる慈悲を懷いだくものあらばその端嚴さ千万倍なり、今の汝
 をそれに比べば獼猴さるの如くに劣りなんと答ふるに、天神はまた梅せ
 檀んだんの木の頭もとすえ尾知れざるものを出いだして、いづれの方が樹かたの根の
 かたにていづれの方が樹梢こすえの方ぞ、疾とく答へよ、と問ひ詰なりぬ。
 王らはまた答へ得ざりしが彼大臣はまた父に教へられて、木を水
 中に投げ入れつ、浮きたる方こそ樹末こすえなれ、根の方は木理きのめつみて
 自然おのずと重ければ下に沈むなりと答へけるに、天神はまた同じやう
 なる牝馬めうま二匹ゆびさを指して、那箇いづれが母か那箇が子か、と詰り問ひぬ。
 君臣共に例の通り答へ得ざれば、彼大臣かのはまたもや父より教へら

れて、草を一時に食はせんに母の馬はかならず先に子に食はせ、子の駒は母より後に食ふことなからむ、と道理を詰めて答へけるを、天神大きに賞讃なし、幾番の我が難問を一々申し開き得たれば、国王ならびに群臣とも心易かれ、今より後は我この国を護りやりて外敵侵害し能はざらしめん、といひ置きて天に上りける。

国王大きに悦びて、これも皆彼者の智慧ありし故なればと、彼大臣を呼び出して恩賞の沙汰ありけるに、この御恩賞としては願はくは臣が罪を免したまへ、実は臣国法を破りて老いたる父を棄てざりしが、その父に尋ね問ひて一々答を得しなり、といひければ王は大きに感歎なし、その老父を召出して師となし、大臣を厚く賞し、なほ国中に令を下して老いたるものを棄つるをば嚴

しく禁じ、四民に孝行を篤くあつ勧められけるとぞ。老いたるもの
て侮るべからず、無用に似たる人をも物をも浪にみだり棄てずば、また
益をなすことあるべし。

青空文庫情報

底本：「日本児童文学名作集（上）」岩波文庫、岩波書店

1994（平成6）年2月16日第1刷

底本の親本：「露伴全集10」岩波書店

1953（昭和28）年7月

初出：「小国民」学齢館

1893（明治26）年6月下旬、7月上旬

※「ルビは現代仮名遣い」とする底本の編集方針にそい、ルビの拗音、促音は小書きしました。

入力：広橋はやみ

校正：門田裕志

2005年1月20日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

印度の古話

幸田露伴

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>